

## 2. JEWEL(ジュエル)

敦賀市立西浦小学校

5年 川端 健太

↓

各務原市立各務小学校

6年 鈴木 元気      今井 創太      岩崎 滉平

後藤 善紀      鈴木 健太

リバーサイドに住んでいる二人の子どもがいました。その名前は、ルナとケイシーです。

ルナは月のように明るく元気。誰にでもじまんでできる得意技がありました。目がとてもいいのです。それに、水泳が大の得意で、バタフライにクロールと何でもできます。由緒ある水泳大会では一位を二年連続でとったのです。

もう一人のケイシーはおっちょこちょい。自分では完ペきをねらっていますが、いつも何か一つ抜けてしまいます。言い方をかえれば、何とも人間味があふれているのです。二人はとても仲よしです。どこへ行くのも……。

ある日、二人は山へ行きました。サザエの形をしたサザエ嶽。

頂上へ着くやいなや、ケイシーが目の前にルビーが落ちているのに気がつきました。二人はびっくり、大あわて。でも、深呼吸を二つ……。

大切に宝箱にしまっておきました。

帰りには、ルナがふもとで何かの地図を見つけ、手に取りました。よく見ると、すみっこに文字で『ルビー・サファイア・エメラルド・ダイヤモンドを集めると、何でもできるよ』と書いてありました。二人は休まずに早速、意気揚々、宝探しを開始しました。

サファイアもゲットしました。心おどらせながら、宝箱に入れました。あまりの簡単さに冷静さを失うのでした。

でも、そこからは停滞。なかなか、残りが見つからずいらいらする日々が続くのです。

忘れかけようとしていた一ヶ月後、ケイシーは大会にでました。その大会は水泳大会ではなく、早食い大会。ハンバーガーを七個。もちろん、結果はビクトリー。実は、大食いだったのです。水泳大会では入賞経験もなかったのですが、ルナと同じように賞状が飾られたことに、うれしさをかくせませんでした。

うれしさの余り、二人はイカダで水島に渡って昼食をとりました。

何と、エメラルドを水島のさん橋付近で拾いました。熱い思いがまたよみがえってきました。

一ヶ月という時間と空間は二人には特別でしたが、こんなに簡単に宝が見つかるのが不思議でたまりません。二人は目を疑いました。二人は昔からある方法で、お互いにほっぺをつねりあいっこしました。

「もしや、僕達の生活を見て、神様が助けてくれたのか」

と、ケイシーはつぶやきました。

その夜のこと、ケーブルテレビの番組から五個のお宝の映像が目に飛び込んできました。

それを見たルナは、

「なるほど。集めていたお宝はケイタイ大王のものだったのか」

「そのお宝でこわされた時空を止めるつもりでいたのか。でも、何かの理由で落ちたのか」

でも、二人は全く返すつもりはありません。ますます燃え、宝探しに精をだすのでした。思い立ったら取るものも手につかず、足が動いていました。芭蕉が『おくの細道』にでかけた時もこのような衝動があったのだろうか。

笹の川へ行くと、光るものを見つけました。それは、ダイヤモンドではなく、金貨でした。ダイヤモンドではなかったけれど、何ものにも代え難い何かがこみあげてきました。

光りを放つ金色の中に、人の顔が描かれていました。杉原千畝です。二人は顔を寄せ合って見入るのでした。

「岐阜県出身だったかな。前に、勉強したよな。すごい。こんなものを見つけてラッキーというより、ハッピーだね」

二時間後、二人は家へ帰ってこう言いました。★

「明日も絶対に、ぼく宝石を探しに行くよ。君も行くだろ、ルナ？」

「当たり前でしょ。絶対に残りの宝石が見つけれれば、なぜか分からないけれど自信を持って言えるわ。そうだ！ 今日見つけた杉原千畝について、インターネットで調べてみましょう」

と、ルナはパソコンにかけ寄りながら言いました。画面上に杉原千畝についての情報が並びます。

「杉原千畝は、ナチスの迫害を受けていたユダヤ人に、ビザと呼ばれるパスポートの役割をもつものを発給して、約六千人にのぼるユダヤ人を救ったんだって」

と、ルナが得意そうに言いました。

「へー、杉原千畝って、そんなにすごいことをした人なんだ」

ケイシーは、感心したように金貨を見つめています。ケイシーがふと何かを思い出したように金貨を机の上に置き、キーボードを打ちました。

『ケイタイ大王』

「ケイシー、あなた意外と機転がきくのね」

ルナがびっくりしてケイシーを見つめると、ケイシーは照れ笑いしながら、ケイタイ大王の情報を読み上げました。

「ケイタイ大王は、他の大王に比べて非常に財産は少ないが、とても正義感がある。そのため、こわされた時空を元にもどそうと、ほとんどの財産をはたいて、ルビー・サファイア・エメラルド・ダイヤモンドの四つの宝石を探している、とあるよ」

「私は、宝石を集めて、ケイタイ大王にわたすわ。私たちの願いがかなうことなんてど

うでもいいの。それが、ケイシーと同じ考えかは分からないけれど…」

ルナは真剣な顔で言いました。それを聞いて、ケイシーは満面の笑みをこぼしました。「君と友達で良かった！」

次の日、二人はまた宝探しに、海へ出かけました。ルナが海にもぐり、ケイシーは岩場や砂浜で探しました。すると、深い海の底で何か光るものを見つけました。

「私にまかせて」

ルナが得意の泳ぎでもぐってみると、それはシャコ貝でした。見とれていると、シャコ貝が光り出して、二人は吸い込まれてしまいました。

二人が目を開けると、目の前に、

「どうすれば助けられるんだ」

と頭をかかえている男がいます。杉原千畝でした。

二人は気になって、何を悩んでいるのか聞きました。千畝は、「ナチス軍から追われているユダヤ人たちを助けたいのだが、助けようにも助けられない」

と言いました。そこで、二人はビザを書くことを教えてあげました。千畝は、教えられたようにどんどんビザを書き始めました。

「ありがとう。これでみんなを助けられるよ。お礼に何かしたいんだが」

「ダイヤモンドを探しているんです」

と、ケイシーが言いました。すると千畝は、

「分かった。私のをあげよう。はい、どうぞ」

と机からダイヤモンドを取り出し、二人にわたしました。

ダイヤモンドを受け取り、気がつくとも元の場所にもどっていました。二人はあわてて持っているダイヤモンドを見てみました。

「これで四つ全部そろったわね。でも、何も起こらないわ」

その時、シャコ貝が割れ、中からパールが出てきました。

「あっ、もしかしてこれが最後の宝石？ 今度こそそろったぞ！」

これで、本当にすべての宝石が集まりました。二人はケイタイ大王の城に飛んでいきました。城では、ケイタイ大王と一人の男が密談をしていました。

「どこかで見たことあるなぁ……。あっ、インターネット！」

そう、この男こそ、杉原千畝を悩ますナチス軍のボス、ヒトラーだったのです。ルナとケイシーは急いでかくれ、話を聞いていると、ケイタイ大王とナチス軍が、手を組んで時空を支配しようとしていることが分かりました。

ケイシーが、がまんできなくなって飛び出し、

「ケイタイ大王、何をやっているんだ。インターネットに書いてあったことはうそだったのか。お前たちのかってにはさせないぞ！」

と言いました。ルナも飛び出すと、ナチス軍が二人に飛びかかってきました。

その時、持っていた宝石が光り出し、ケイタイ大王とナチス軍たちをつつみこみしました。宝石の光は、心のけがれを落とし、ナチス軍を元の世界に帰しました。こわれた時

空は元にもどり、平和がもどってきました。それからというもの、ナチス軍の人も軍をやめ、杉原千畝と一緒にビザを書いて協力しました。ケイタイ大王は、心を入れかえて、まじめに王様の仕事に務めるようになりました。

さて、ルナとケイシーはどうなったのでしょうか。  
「やばい！ 夏休みの宿題やってない。どうしよう」  
あわてるケイシーを見て、ルナが言いました。  
「少し手伝ってあげるから、がんばりましょ」  
二人の今年の夏休みは、少し特別な夏休みでした。